

招く通信

招く通信

2022年3月号(年2回発行) 発行 社会福祉法人拓く 法人本部 〒830-0071 福岡県久留米市安武町武島468-2 TEL0942-2712039

第20回 ポレポレ祭り「心を寄せ合い未来にそなえよう」報告

やってみようから始まる 未知への挑戦

2021年11月7日、第20回ポレポレ祭りを開催。8つの会場をつないでのオンラインイベントです。YouTubeの生配信も同時進行。280名が参画し、みんなで「やってみよう」と挑戦しました。

社会福祉法人 拓く 統括本部長 北岡 さとみ

今回は新型コロナ感染状況を考慮して、オンライン上でのイベント開催でした。オンライン会議さえ慣れていない私たちには未知の世界です。準備期間はわずか2ヶ月。自分たちが「発信できること」はあるのだろうか。視聴者が楽しめるオンラインイベントとは何なのか。そう問い続けながら、「やってみよう」から始めました。

まずはコンテンツ作りです。当法人の取り組みだけではなく市内の活動拠点も紹介しようと8つの内容に決定。住民の居場所づくりを進めている地域の方々に声をかけて対話を重ね、一緒に考えるうちに、「あれもできるかな、これもできるかな」と企画の可能性が広がり、「発信したいこと」が増えていきました。次は、動画編集等の技術習得です。デジタル操作が得意な人に任せていた職員も「教えてもらい、やってみよう」と奮起。互いの競争心に火が付き、準備が加速しました。当日は、5時間15分にわたっての生番組です。映像や音源がとぎれないようプロの方々の協力を得ながら、2ヶ月間280名が参画して積み上げた「思い」をつないで配信しました。その結果、みんなの力を100%、もしくはそれ以上引き出すことになり、「あれも！これもしたい！」という全員の前向きな取り組みによってエンターテインメント性の高いオンラインイベントを創り上げたと思います。

今回のポレポレ祭りを通して得たものは、未知のものに挑戦する精神の大切さでした。誰であれ困難な問題や未経験の事柄には不安を感じるものです。だからこそ「やってみよう」と一歩を踏み出すこと、不安を感じている人を支えようとまた一歩前に出ること。そのためにも日頃から声をかけ合い、互いに助け合える関係性を築き上げながら、私たちは挑戦し続けていきたいと思っています。



グリーンバックの前で進行役を務めました。

北岡さとみ

進行役は手作り帽子を被って、コンテンツごとに衣装を変えて登場。



3台のカメラを使っている中継

ライブ配信に必要な情報を集めた画面。録画映像などプロのオペレーターによるライブ配信。



LIVE

事前に手作りした衣装の数々！

連日、夜遅くまで打ち合わせながら準備をおこなった。

第20回ポレポレ祭り 収支決算報告

収入の部		支出の部			
項目	金額	項目	金額	項目	金額
協賛	1,451,000	消耗品	85,933	その他	186,976
バザー売上	55,291	バザー材料代	46,334	支出合計	1,324,413
その他(お祝い・利息)	15,038	通信・印刷・パンフレット代	13,250	収支差額	196,916
収入合計	1,521,329	配信・中継・映像代	991,920		

第21回 ポレポレ祭り
夢気球コンサート2022
開催決定
2022年11月3日(祝) 会場 石橋文化ホール

社会福祉法人拓く 1970年代より久留米市で展開した障がい児の保護者と教員による統合教育運動が原点。2000年10月法人設立。障がい者が重くても誰もが地域で暮らすために「コミュニティづくり」に取り組んでいます。

事業所 出会うの場ポレポレ・夢工房・グループホーム・居宅介護支援センター
出会うの場Leo・相談支援センターカリブ・久留米市西部障害者基幹相談支援センター



「withコロナ」の時代 拓くの「次世代」が始動。 ～職員一人ひとりの「始まり」の物語～

❖ 理事長メッセージ❖ 社会福祉法人拓く 理事長 馬場 篤子

巻頭写真は、今年1月31日、当法人が独自に利用者や職員を対象として抗原定量検査を実施している様子です。乗車したままで説明・検査を受けるドライブスルー形式。結果は100名全員陰性でした。1月に1名の陽性者が発生。保健所に連絡してもその業務はひっ迫、対応を待つ間、利用者や職員への感染拡大を防ぐために何かしなければと、自分たちで検査キットを持ち防護服を着て検査をしたのです。本年度予算に検査費用等300万円を計上。法人内に検査キットを常備して、遠来の客や体調が悪い人の検体採取も自分たちで、次々に職員が意思統一を図って実施しています。これまで、公費による定期的PCR検査の回数を含めれば、1,000回以上の積み上げとなりました。

「withコロナ」の時代は何をもたらしているのか。時代をけん引するのは次の世代。そして今、次世代の行動力、技術力、推進力に感心しています。感染症への恐怖が強かっ

た職員は必要に迫られて自主防疫力を身につけながら保健所や行政、医療従事者のパートナーになろうと感染防止の最前線に立ち、私たちが旗振りをして結成した市民団体「そなえるくるめ」(2頁掲載)は保健所の協力要請を受けて、2月にワクチン接種申請(3回目)の支援活動を実施。また、デジタル化の取り組みを加速し、オンラインやSNSによる情報伝達などの環境整備も円滑に展開させています。災禍などの「有事」こそ、自分のこと、家族のことだけ考えるのではなく、誰もが自発的に「人を想う心」を持ち行動し、それが直接的でなくても人から人へ循環していけば、世界を救っていけると考えます。その願いの下、職員たちは次代を担うリーダーになろうと動き始めました。その姿に接するにつけ誇らしくもあり、一番の応援者でありたいと思っています。今回の拓く通信には、彼らが日々奮闘する姿を掲載。職員一人ひとりの「始まり」の物語です。

❖ CONTENTS ❖ ●「そなえるくるめ」の実践…2 ●特別寄稿 藤木 則夫氏…3 ●「Leo」と「ぶらっと」みんなの笑顔が見たい…4 ●地域食堂…5 ●施設外就労…6 ●グループホーム…7 ●第20回 ポレポレ祭り 報告…8

「そなえるくるめ」の実践 希望とは、自分・自分たちで創るもの。

結成
1年目!

当法人は、2011年より東北震災支援、熊本震災支援、朝倉豪雨支援、さらには、久留米での度重なる豪雨災害の支援を行ってきました。2021年6月、当法人が事務局を務め、住民による自主防疫・防災団体「そなえるくるめ」を結成。民間活力を生かした自主防災システムを久留米で創りたい。



3回目ワクチン接種の申請支援。動画で各拠点のサポーターへサポート手順の紹介。記録用紙など役立つ情報もホームページで公開しました。



浦川 直人

社会福祉法人 拓く 本部長 浦川 直人

2021年4月、法人利用者と職員に新型コロナ陽性者が発生。何をすべきか分からず気が動転するばかり…保健所も対応が追いつかず、まさかのパンク状態です。自分達が防護服を着て検体採取やゾーニング等を行いました。そんな時に心強かったのは、既に感染発生・対応した事業所からの物資援助や「何かあれば応援に行くよ」という力強い声掛けでした。大規模な災害などの際、行政には頼れないが当法人のように自分たちで悩み考えながら感染対策をし、利用者や身近な人の命を必死に守ろうとする事業者や個人はいるはず。民間活力を生かしてつながり活動すれば、乗り越えられるのではという希望が湧き上がりました。

そこで6月、当法人が旗振り役となって「そなえるくるめ」を結成し、ホームページを開設。「天災やコロナなど、困難な状況に対して自分たちができることをシェアし、みんなで支え合っていこう!」とノウハウ・経験談の情報発信、自宅待機中の感染防止のためのグッズ配布等具

体的に動き出しました。同時に、災害時の対応力を磨こうと法人内の職員の意識改革にも着手。従来は主任以上が対象の災害対策会議に正職全員が参加し、主体的に災害状況を把握し手立てが考えられるようにと、司会も提案も委ねました。コロナ禍において実践を重ねながら全職員が一体となって困難さを共有し、前進しようという機運が次第に高まってきたと思います。

2022年2月、保健所より「そなえるくるめ」に3回目ワクチン接種の申請支援について協力要請がありました。インターネット予約に戸惑う高齢者等の力になろうと、保健所と協働して事業所等9拠点が賛同して予約代行を実施(10日間で合計142件)。高齢の方々からは「インターネットは分からんけん、助かった」と。支えたいという思いを「カタチ」にできたのは大きな経験、財産になったと思います。「そなえるくるめ」の結成1年目、希望とは自分・自分たちで創り上げるものだと改めて実感しました。

ワクチン接種予約サポートをホームページに掲載。



西日本新聞 2022.2.5 朝刊掲載

ホームページは、久留米大学の教授や学生と一緒にオンラインで打合せしながら随時更新。

新聞等でも報道されました。

特別寄稿

「拓く」と私を繋げてきたものは? 「共感」

社会福祉法人拓く 評議員 藤木 則夫

元厚生労働省障害福祉課長、東北厚生局長(東日本大震災現地復興対策本部長)

2007年7月、「第3回フォーラムinくるめ」の登壇者として呼んで頂いたのが、「拓く」の皆さんとの出逢いでした。久留米地方に台風の直撃が予想されていて、「中止だろうけれど、とりあえず久留米まで行ってみるか」と東京を出発したものです。当日は想定通りの台風襲来でしたが、フォーラムは予定通りとの連絡が。エエエエ〜!!! 参加者は少数だろうと会場入りしてみれば、定員1,500名のホールは、ほぼ満席。エエエエ〜!!!! その出逢いは、驚愕の中で始まりました。

「誰一人救いの網の目から漏らさない」という「拓く」の姿勢は、国の事業への参画という形で「谷間の支援」へ、その後、北海道「べてるの家」の理念を主題として描かれた映画『降りてゆく生き方』をテーマに、シンポジウムの開催など、次々に縁が繋がっていきました。縦割りで、型にはまった窮屈さ一杯の国の制度・事業を、実際に「人が生きている」地域で、「拓く」の皆さんが、多くの厚生官僚や有識者を久留米の地に呼び込み、規制を緩め、壁を解き放ち、正しい方向への示唆を与えてくれた貢献は大きかったと思います。

2011年3月に東日本大震災が発生し、私は東北厚生局長として現地の復興支援の任に当たりました。全国各地から年代も仕事も専門性も異なる人たちが支援に集まる中、「拓く」の皆さんも日頃の実践活動を活かして度々被災地を訪れ、「拓く」流の手法で被災地の人々の力強い支えになりました。そのご縁は深く強い絆となって、

震災後11年を迎える今日まで続いています。

その源は何でしょうか? 結びついてきた力は何でしょうか? なぜ、毎年のポレポレ祭りに多くの人達が参加するのでしょうか? 私も含め、厚生官僚や多くの有識者の方々が、その活動に引き寄せられ縁を紡いでいるのはなぜでしょうか? 「拓く」の皆さんは、被災地で小学生のありのままの姿に触れて、ありのままに感じ、受け止め、気持ちを共有しておられた。その姿勢によって、小学生にも、心の落ち着きや安心感がもたらされた。ともに喜び、ともに悲しむ「共感」という作用が、そこに生まれていたのでしょうか。

「拓く」とのご縁を頂いて、久留米の皆さんはもちろん、多くの素敵な方々との出逢いがありました。「素晴らしい人だな」「自分も、少しでも近づきたい」「こんな風に考えることもできるんだ」「自分の発想はまだ固いな」と、このような「共感」の積み重ねの中で、自分を磨き、人間的な成長が幾ばくか図られているのかなと思います。「地域共生社会」や「伴走型支援」も、「共感」しながら、それを原動力に人とかがわっていく中で実現されるのではないのでしょうか。

コロナ禍の中で、私たちは大きな犠牲を払い、多くのかけがえのないものを失いました。反面、これまで見えていなかったのが見え、新しい価値観が生まれ、ライフスタイルも変化しつつあります。世界が変化していく中で、新しい「共感」の世界が始まり、新しい自分が見つけれられたらと思います。

※フォーラムinくるめ 2005年より4回開催。(拓くは事務局を務める)
テーマ「障がいがあるからこそ、ここで暮らす、そんなまちにしたい」のもと、当事者・福祉・医療・教育・行政と手をつないで1,000人規模で開催。
※2008年頃、制度にない対象者であった「引きこもり」「虐待」「DV」などの支援



2008年「谷間の支援を障害者と地域の人でつくる事業」報告会 藤木氏(左)



2011年「降りてゆく生き方」シンポジウムにて 後列左: 藤木氏。筋ジストロフィーの塚崎修平氏が実行委員長(前列中央)、北海道から竹田保さん(前列左)、加藤孝さん(後列左から2番目)が参加。馬場理事長は後列中央。



初めての家族写真。団子の位置も大和君がこだわり場所決め。お母さんは、「一生残っていたい」と。



大和君の「樺人間」という自作の歌に合わせて、みんなもダンス。彼らしい表情と動きが写った一枚です。

「Leo」と「ぷらっと」が織りなす物語 その③

みんなの笑顔が見たい。それがわたしたちの原動力

Leoとぷらっと。荘島町の一軒家にあります。

1階の隣同士で、2階の2部屋は、時には児童の放課後の居場所、親や地域の皆さんの会議会場に。職員は、足を運ぶ皆さんのつぶやきを拾いながらの日々。今回は、1日だけの「Leo写真館」の物語です。

出会いの場Leo 管理者 溝尻 博子

「七五三の写真撮影は諦めています」

あるとき、大和君(3歳)のお母さんのつぶやきに、はっとしました。「諦め」という言葉が心に響いてきて、お母さんの話に耳を傾けました。「実は1歳の記念に写真館へ。でもわが子はじっとしていませんので、上手く撮影ができませんでした」。でもご家族は、本当は諦めたくないはず。このご家族に笑顔と安心を届けたい、大和君の成長をみんなで祝いたい。その気持ちが日に日にわたしたちの中に強くなりました。「七五三の写真を撮りましょう。ぷらっとの2階を会場にしてLeo写真館に」。お母さんはうれしそう。「ぷらっと、荘島」の職員と共に、人と物の手配です。着物に着付け、メイク、ヘアアレンジ、カメラマンと役目を頼まれた皆さんはやる気満々、まるで自分の子どもや孫を想うように準備を進めました。

11月、大和君のお父さんもスーツを着ての参加。大和君の好きな歌をBGMにダンスをしたり風船やシャボン玉で遊んだりして、撮影終了です。会場は感動と拍手に包まれて、大和君、お父さん、お母さん、そして関わっ

たみんなも笑顔に。幸福な時間を共有した1日となりました。「みんなの笑顔が見たい」、それがわたしたちLeoとぷらっとの原動力だと実感しました。

2022年2月、第6波となる新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、Leo関係者に陽性者が発生し1週間の閉所となりました。自分たちにできることをしようと、毎日、利用者の自宅に飲食物や必要な日用品等を届けました。電話で状況をお聞きする際に、保護者の方々から「先生たちこそ大丈夫ですか」との言葉を頂くことも。一層信頼関係を築けたような気がします。日々できることは真摯に細やかに、相談しながら励まし合いながら一緒に苦難を乗り越えていく。そうすることで絆が太く強くなるのでしょう。この経験を糧にして、みんなで前を向いて突き進んでいきたいと思います。



Leo職員の友人の母とお友達が着付け担当で黒木町より参加。着物も持参。「いつでも協力します!」



Leo&ぷらっとのみんなと集合写真。笑った表情を撮影しようとカメラ担当の方が、ふざけてみたり、冗談を言ってみたりと必死でした。(撮影協力・秋山フトシ)

※「ぷらっと、荘島」は、「出会いの場Leo(児童発達支援)」に併設。2021年「(一社)ぷらっとどっと」を設立。当法人は、公益事業の一環として「ぷらっとどっと」の活動に参画しています。

「地域食堂」の実践「助け合う」自治へ「何となく」の関係から「持ちつ持たれつ」の関係に

一般社団法人ほんによかね会が運営する「地域食堂」は、21チームの担い手が週6回の食事を提供しています。一人住まいの高齢者を始め地域の皆さんの暮らしを支えています。

出会いの場ポレポレ 管理者 小川 真太郎

コロナ禍という前例のない事態において、当法人の活動も常に臨機応変な対応が求められ、「決断・企画・話し込み・行動」の繰り返しです。その中で、昨年の秋冬、「20周年温泉旅行」を実施。感染対策を徹底しつつ、利用者や保護者の方々が緊張状態から一時でも解放されて、楽しんでほしいとの想いです。参加して良かったという声を頂きましたが不参加の家族もおられ、お誘いが十分だったのか、もう一步踏み込むには、と改めて自分の課題を問い直す機会に。その答えは私たちがポレポレ利用者と共に運営している「地域食堂」の実践に見出しています。

地域食堂の目的は、お客さんへのいわゆる「サービス×サービス」の掛け算だけではありません。21チームを結成しての輪番制を取り、「ポレポレ利用者×利用者以外の地域の方々」「ご高齢の女性×若者」といったチームごとの掛け合わせの関係づくりに力を注いでいます。みんなに、やる気をもって働き続けてほしい。そう考えて、私は

利用者送迎、弁当配達、献立づくり、買い物、売上計算と多様な仕事をこなしながら、双方を取り持つ調整役を。意見の違いの仲裁に入ったり悩みや気持ちを聞いたり、正直気が休まる暇はないのですが、これが一步踏み込むという実践そのものと実感しています。約2年を経て、現場に「助け合う」姿が見えてきました。当初は気を遣い「何となく」の関係でしたが、今では「持ちつ持たれつ」の関係です。ご高齢の女性は大鍋料理のベテランでも機器が苦手、若者は料理が不得手でもスマホなどのデジタル操作に強くて力持ちと助けたり助けられたりの毎日。調理人とお客さんの関係にも変化が生まれています。

「和食が食べたいかな。油を控えたほうが良いな」「これだけおかずを作るのは大変だったろう。ご苦労様」コロナ禍、災害多発、少子高齢社会の今を生きる私たち。地域食堂の実践を通して、老若男女が混ざり合い、助け合う「自治」の心を育てていきたいと思えます。



利用者の動き(野菜切り込み、卵わり)

真摯にか...



若いポレポレ職員もベテラン先輩に調理方法を学んでいます



大鍋を運びます!

力作業は若者にまかせて!

小川 真太郎

※当法人は、公益事業の一環として「ほんによかね会」の活動に参画しています。「(一社)ほんよかね会」は、JAくるめ安武農産物直売所「そらまめ」にて農作物販売や地域食堂などを展開

企業の人たちと一緒に「はたらく」物語 その①

施設外就労3年目
まず、私たち職員の意識改革から。

※本格的に施設外就労を始めて約2年が経ちます。現在は3社と契約し、利用者の方々に賃金を支給しています。企業が求めているのは、「作業スピード」「正確さ」「安定した労働力の確保」。365日、交代制で働く現場です。それでも、利用者の方は「施設外での仕事がいい。行きたい」と。今、私たち職員の意識や姿勢を問い直していきたい。

出会うの場ポレポレ 係長 野上 真紀子

私は今、施設外就労チーム(就労継続支援A型)の担当です。「ポレポレ」の利用者と職員でユニットを組み、高齢者施設にある厨房に出向き働いています。以前切り盛りしていた惣菜店の延長線上ならば、利用者も私も業務をこなせると思っていたのですが、当初は食材の切込みや食器の洗浄作業が驚くほどの仕事量に感じました。疲労は溜まり時間内に業務がさばらず、私はよく落ち込みました。しかし、利用者は「みんなで頑張ろう」と前向き。業務の修得までに時間は要しますが、いったん身に付いたら、「この食材はこうしたらいいですか?」「次はこれをしますか?」と確認作業を行い、食器の洗浄から乾燥庫への収納、野菜の切込みを時間内に済ませようと手を止めません。時に企業担当者の方から厳しく注意をされても、その懸命に働く姿、集中力、忍耐力には頭が下がります。

今までとは、利用者の「働く姿」が明らかに違って見えます。新しい環境で覚える点が多いにも関わらず、施設外就労の仕事場ではいきいきと働いておられるのです。当事業所内の仕事と何が違うのか。利用者がもっと輝けるような「働く現場・環境」とは何か。どうしたら作り出せるのか。今一度問い直す機会と捉えています。例えば、利用者がしっかり時間内に働けるよう事前に準備を入念にし、達成感を感じられるよう日々の目標を明確にしていく。また、企業側にも満足していただけるよう、集中して持続的に働けること、立ち仕事に慣れていくことなど、事業所内での課題を明確にし、改善しなければと思います。

まず、私たち職員の意識改革。日頃から施設外の生産現場を常に心に留めておくこと。そして、就労への姿勢や体力、技能、コミュニケーション力の向上を図りながら、施設外へ飛び出していけるよう体制を整えたいと思います。

※利用者と職員がチームを組み、請負った作業を企業内で行う活動。



切込み作業

野上 真紀子

パブリカできました

下処理した食材を職員に渡します。



洗浄室内の作業

食器振り分けは、手を止めず一人一人の役割で働いています。



清掃作業の準備

清掃の作業前には段取りを話しながら一緒に準備します。



乾燥庫へ収納

休憩中

企業内の憩いの場でのひととき。企業の職員の方とも交流しています。



コロナ禍でも楽しみはなくさない

クリスマス会

利用者の希望から、「やりたい事」を実現。たこ焼きパーティーです。

名物「ポレポレたこ焼き」は出店先で大人気。地域の方と手を取り合って地域を盛り上げています

児玉 元気

利用者同士、助け合いながら暮らしています

地域で暮らし続けるために 今から「備える」物語 その①

グループホーム「土曜日の暮らし」
今こそ、互助会を立ち上げる

障がいがある人もない人も、当たり前で地域で暮らし続ける。その願いの下、重度の障がい者のグループホーム(以下・GH)の2カ所、「チェムチェム(2005年)」、「ニュンバ(2006年)」を開所。私たちの夢をカタチにしました。次なる夢は、地域の人と助け合いながら暮らすこと。

グループホーム「チェムチェム」主任 児玉 元気

13年前に入職し、最初に携わったのがGH「チェムチェム」。当時、週3回夜勤、昼は外出支援をし、「サービスを提供する」職員というより利用者の「仲間」という感じで一緒にやんちゃをしたり、ふざけたりと、大半の時間を共に楽しんでいました。保護者とも地域の人とも、たこ焼きを焼いたり、飲み会や食事会をしたりと家族の一員のような関係を築いてきたと思います。利用者は、月曜から金曜までGHで過ごして土曜日は帰宅、家族との外出や旅行などを楽しみ、その暮らしは変化に富んだものでした。しかし、数年前より保護者が亡くられたり入院されたりと家庭環境が徐々に変化し、利用者の行き場をどう確保するのか、緊急時の対応が課題に。そんな中、2021年度6月より、GH「ニュンバ」は土曜日を開所。としても、職員の配置人数や支援の時間が限られており、利用者と「暮らしを共に楽しむ」に至っていない点に悩んでいました。私たちが夢に描いているカタチは、利用者

が「多様な人」と混ざり合い暮らす姿なのです。まずは「土曜日の暮らし」。職員だけではなく地域の皆さんと一緒につくりたいと考え、こう呼びかけています。「土曜日、GHの利用者と過ごしてみませんか」当法人の支援団体の「ポレポレ倶楽部」「保護者会」や地域づくりの仲間「直売所そらまめ・地域食堂(5頁掲載)」「①をつくらう」「②じじか」の方々に、アイデアをいただきながら進めていくことにしました。手始めとして、今年の3月に保護者や職員と会合をもち、「誰かが病気になった時に助け合えるといいね」と、具体的に時間、お金、労力を念頭に置き、「互助会」のようなカタチで実現したいと話合っています。「人に頼ってやってみると、何とかなる。道は拓ける」私たちは地域食堂の運営から、そう確信しています。土曜日の活動も互助会づくりも、人を信頼してまずは始めてみることに。新たな実践に心が引き締まっています。

①障害児の親の会。2017年発足、地域でつながりながら育つことを大切にしている活動
②ひとり親家庭支援の市民団体。2020年発足、実家よりも実家という暮らしの拠点